

大磯町における全国学力・学習状況調査結果の報告

平成 25 年 12 月 3 日

大磯町「全国学力・学習状況調査」結果分析・活用検討委員会

「教科に関する調査」結果の分析及び活用について

【小学校国語】

国語 A 「知識」に関する調査

「書くこと」の領域について、平成 21 年度よりも正答率は上昇しているが依然課題があるのは、文の意味のつながりを考えながら接続詞を使って 1 つの文を 2 つの文に分けて書くこと、である。既習の接続語の役割をしっかりと押さえたうえで、長すぎて意味がわかりにくい文章を複数の文に分けて書く学習を重ねていくことが大切である。

「読むこと」の領域については、資料を的確に読み取り考察する力に課題がある。物語などの文章形式だけでなく、俳句・短歌や広告・新聞・情報誌などのさまざまな形式の文に触れさせる機会を設け、内容や情報を的確に読み取る力をつけさせたい。また、資料から情報を取り出すだけでなく、その情報を基に自分の考えをまとめる力をつけるために、調べたことを報告する文章を書くなどの言語活動を、国語以外の教科・領域でも多く取り入れていくことが有効である。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の、漢字の読み書きやことわざの理解などについては概ね良好である。当該学年で学習した漢字を、正確に読んだり書いたりできるように繰り返し練習するとともに、さまざまな場面で実際に使用することで確実に定着させる指導や、国語辞典や漢和辞典を利用して調べる習慣をつける指導を、今後も継続していく。

国語 B 「活用」に関する調査

「話すこと・聞くこと」の領域では、相手の立場や状況を感じ取りながら聞くことについては相当数の児童ができていて、平成 21 年度の類似の問いよりも正答率が上昇している。しかし、話し手の意図を捉えたうえで適切な助言をする力は十分ではない。共感的な態度で、相手の話す内容を理解しようとして聞く姿勢は身に付いているので、それに対して自分の考えを明確にしながら、相手の立場や状況にあった適切な助言をするような活動場面を設定する指導の充実を図りたい。

また「書くこと」の領域では、目的や意図に応じ、必要な内容を引用することや、複数の内容を関係付けながら自分の考えを書くことに課題がある。目的や必要に応じて文章の要点や細部に注意しながら読み、文章を引用したり要約したりすることを学年の段階を追って計画的に指導することが必要である。また、個人やグループで課題について調べ、意見を述べたり活動を報告したりする文章を編集するなどの言語活動を、国語以外の教科・領域でも多く取り入れていくことが有効である。

「読むこと」の領域では、2 つの推薦文を読み比べて、推薦している対象や理由、読み方の違いを捉えることについては、理解が十分とは言えない。まずは、ある程度の長さの文章を集中して読みとおす力をつけた上で、本や文章を読んで推薦文を書くという課題を設定し、本や文章の選択のしかたや読み方の工夫の指導をする必要がある。目的に応じて本を読み、相手を意識して推薦文を書くには、本の帯やポップカード、リーフレット作りなどの方法を取り入れた指導も効果的である。

【中学校国語】

国語A「知識」に関する調査

基礎的・基本的な知識・技能は全体的にかなり定着している。

「話すこと・聞くこと」の領域では、話し合い活動での司会の役割は理解できているが、司会が状況に応じてどのような役割を果たしたらよいかについては課題が残る。実際に具体的な話し合いの場面を設定して、司会の役割を意識させながら学ばせるような指導が必要である。また、国語以外の教科や学級活動に話し合い活動を取り入れて、国語での学習を活用する場を設定することも大切である。そのためには、教科・領域を越えて国語における指導内容の共通理解を図り、学校全体で共通の、話し合い活動のポイントを押さえた指導をすることが効果的である。

「書くこと」の領域については、伝えたい事柄を明確にして書くことに課題が見られる。伝えたい事柄を相手に効果的に伝えるには、文章の構成や表現を工夫することも大切である。そのためには、よい手本となるような文章を提示して自分の表現に取り入れさせるような指導や、書いた文章を互いに読み、助言をし合うような学習活動も有効と考えられる。

「読むこと」の領域に関しては、文章の表現の特徴を捉え、語句の意味を理解し、内容をつかむことは相当数の生徒ができています。必要な情報を読み取る力をさらにつけさせるために、論説文以外にも新聞や情報誌、パンフレットなどのいろいろな文章媒体を、明確な目的を持って読ませるような指導が必要である。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、文脈に即して漢字を正しく書いたり読んだりする力が身に付いている生徒が多いが、同時に無回答率も他の問いに比べるとやや高くなっている。小学校での漢字指導を中学校でも丁寧に継続し、漢字の字形や画数、読みなどの基本的事項をしっかりと指導していく必要がある。語句の意味を理解し文脈の中で適切に扱うことについては、設問によって正答率にばらつきがある。特に、比喩を用いた表現について理解することや、歴史的仮名遣いについての知識・理解に課題がある。言葉への関心を高め、言語感覚を豊かにするために、さまざまな形式の文章や伝統的な言語文化に触れさせる機会を増やす指導が必要である。

国語B「活用」に関する調査

基礎的・基本的な知識・技能を適切に使うことに関しては相当数の生徒ができています。

「書くこと」「読むこと」の領域では、文章の展開に即して内容を捉えたり、表現の仕方に注意して読み、その効果について考えたりすることはかなりの生徒ができています。一方、興味を持ったことからテーマを決め、それに応じた情報の収集方法を考えることについて課題があるのは経験の不足が原因だと思われる。また、文章の構成や表現の特徴を捉えることにも課題がある。自分の課題を設定し、その解決のために必要な情報を集めるさまざまな手段について学び、実際に情報を収集して、その中から必要なものを取捨選択しながら課題解決に至るような学習の機会を増やしていく必要がある。そのためには、国語以外の教科や学級活動にもこの課題解決の手法を取り入れて、国語の学習を活用する場を設定することも大切である。

【小学校算数】

算数A「知識」に関する調査

「数と計算」領域において、整数・分数の四則計算の理解については概ね良好であった。しかし、小数第2位までの数と小数第1位までの数の加法にやや難がみられた。小数の加法・減法は同じ位どうしで計算を行うことを意識させ、小数の乗法との計算の違いを丁寧に理解させる必要がある。

「量と測定」領域においては、曲線部分の長さを測定する際に用いる適切な計器を選ぶことは相当数の児童ができていた。また、1 a (1 アール) の単位の意味も比較的理解されていた。しかし、単位量当たりの大きさを求める除法の式の意味を理解することに課題がある。単位量当たりの大きさを比較することは、単位となる大きさを1にそろえて比較していることであると理解することが重要である。特に、2つの数量のどちらを単位とするかによって、数値の比較の仕方が異なることを理解し、目的に応じて適切に処理できるようにすることが大切である。図に表すなど視覚的に理解できるよう指導を工夫することが必要である。

「図形」領域においては、円柱の見取図の高さと展開図の側面の辺の長さなどが対応していることを相当数の児童が理解できていた。しかし、合同な三角形をかくために必要な条件を理解することに課題がある。合同な三角形をかいたり、作ったりしながら、合同な三角形にならない場面も取り上げるような算数的活動を一層充実させ、図形が1つに決まる意味を実感的に理解することが必要である。

「数量関係」領域においては、割合の感覚が概ね身に付いており、基準量と比較量の大きさの関係の理解は良好であった。

算数B「活用」に関する調査

「数と計算」領域においては、日常の事象を数理的に捉え、情報を整理し、筋道を立てて考え、判断することが苦手な児童が少なくない。日頃から日常の事象を数理的に捉え、表にして整理したり、整理の仕方を言葉で表現したりする習慣が身に付くような指導の工夫が必要である。

「量と測定」領域においては、図に示された分割の仕方とその説明を対応させることはよくできていた。示された式や表を基に、その計算結果が何を求めているか考えたり、表の数値を基に、2つの数量の関係を数学的に表現したりすることに課題がある。言葉や数、式、図、表、グラフなどの表現を関連付けて考える活動を充実することで、数量や図形の意味を実感的に理解できるようにすることが大切である。

「図形」領域では、示された情報から2つの要素の意味を解釈し、位置を特定することは相当数の児童ができていた。しかし、ある場面で成り立ったことがほかの場面でも成り立つかどうかを判断することに課題があった。1つの場面で発見した事実が、他の場面でも当てはまるかどうかを吟味する活動を通して、その事実がどのような場面で成り立つのかを調べることにより、統合的・発展的な見方を育てていくことが必要である。また、いろいろな考え方や解決方法を発表し合う場を設定し、他者の発言や記述内容を基に、解決方法や用いられた考え方を理解したり、表現のよさに気付いたりする指導の工夫が大切である。

「数量関係」領域においては、示された式に数値を当てはめて計算し、計算の結果を基に問題を解決することに課題があった。計算の順序についてのきまりを、具体的な問題の各場面と関連づけて捉えることができるような指導の工夫が必要である。また、割合が同じで基準量が増えているときの比較量の大小を判断し、その判断の理由を言葉と数や式を用いて記述することに課題があった。日頃から、解決に導いた判断の理由や事実が成り立つ理由を説明する場を積極的に設定するような指導をより一層意識していきたい。

【中学校数学】

数学A「知識」に関する調査

「数と式」領域においては、基本的な計算の理解については概ね良好であったが、数量の関係や法則などを文字式で表すことに課題があった。文字で扱うだけでなく具体的な数に置き換えて考え、単位量を具体的な数で確認した上で、数量の関係を文字式で表すような指導をより一層取り入れることが必要である。単位量の理解については小学校から丁寧に指導していく必要があり、小学校との連携をさらに進めていくことが大切である。

「図形」領域においては、1組の平行線に直線が交わってできる角の性質や証明の中で根拠として用いられている三角形の合同条件について概ね理解できていた。しかし、角の二等分線の作図の方法を図形の対称性に着目して見直すことや、円柱と球の体積の関係についての理解に課題がある。具体的に模型を用いたり、実験による測定を行ったりして確かめる場面を設定するなど実感を伴って理解できる指導の工夫が大切である。

「関数」領域においては、座標平面上の点の位置を表すことや与えられた一次関数の式について、 x の値に対する y の値を求めることは相当数の生徒ができていた。関数の意味の理解や一次関数の表の特徴を基に変化の割合を求めることに課題があった。事象において数量の関係を見だし、それを関数として捉え直させるように指導することが大切である。また、一次関数の表から変化の割合を読み取ったり、逆に、変化の割合を基にして表に示されていない値を求めたりするような、双方向の活動を取り入れるなどの指導の工夫が引き続き必要である。

「資料の活用」領域においては、与えられたヒストグラムについて相対度数を求めることや、確率の意味の理解に課題がある。ヒストグラムから相対度数を実際に求めることを数多く体験し、資料の傾向を読み取ることで相対度数の必要性と意味についての理解を深められるようにする必要がある。また、確率の意味について、実験を通して体験的に理解できるようにするなどの指導が大切である。

数学B「活用」に関する調査

「数と式」領域においては、事柄が成り立つ理由について筋道を立てて数学的に説明したり、事柄を発展的に考え、予想した事柄を説明したりすることに課題があった。事象を多面的に見ることができるよう指導することや発展的に考えることができるように指導する必要がある。具体的には、問題を解決した後、その条件を変える視点などを示し、生徒自らが新たな事象を見いだすことができるような機会を増やすことなどの工夫が望まれる。

「図形」領域においては、示された方針に基づいて証明することや、証明の新たな方針を立てることに課題があった。証明において、与えられた条件を整理し着目すべき性質や関係を見いだすことをより丁寧に指導することが望まれる。また、証明の方針に基づいて、仮定から結論を導く推論の過程を的確に表現することを、途中で諦めることなく根気よく取り組ませる必要がある。

「関数」領域においては、言葉で表現された事柄の数学的な意味を的確に捉え、数学的に表現することや、事象を数学的に解釈し問題解決の方法を数学的に説明することに課題がある。日頃から身の回りにある事象を数学的に関係づける意識を持たせられるような授業の工夫や、自分の考えを数学的に説明する機会をより一層増やすことなどが大切である。

「資料の活用」領域においては、資料から必要な情報を適切に読み取ることは概ね良好であったが、資料の傾向を的確に捉え、事柄の特徴を数学的に説明することに課題があった。不確定な事象について問題を解決できるようにするために、目的に応じて資料を分類整理し、資料の傾向を読み取り、資料の傾向を捉え直すことができるように指導することが大切である。また、身の回りにある日常的な事象の資料を意識して準備することにより、数学を通して得られた結果を実感できるような場面を設定することなどが必要である。

「質問紙に関する調査」結果の分析及び活用について

【小学校】

「朝食を毎日食べている」「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」「学校で友達に会うのは楽しい」と回答した児童が非常に多い。また、「人の気持ちが分かる人間になりたい」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」「人の役に立つ人間になりたい」と回答した児童の割合も非常に高く、平成 21 年度調査よりもさらに増えている。

平成 21 年度調査では「学校のきまりを守っている」と回答した児童の割合がやや低かったが、本年度調査では改善されている。

一方で、「家で学校の宿題をしている」と回答した児童は多いものの、「学校の授業時間以外の勉強時間が 30 分未満」と回答した児童の割合がやや高く、家庭での学習時間は正答率と深い関係が見られるため、適切な指導を行う必要がある。

さらに、「1 日当たり 3 時間以上テレビゲームをする」と回答した児童の割合が増えており、正答率との相関があるため、今後も引き続き、家庭学習の課題を適切に与えるなどして、よりよい生活・学習習慣が形成されるように、家庭と連携を密にして取り組んでいくことが大切である。

【中学校】

「朝食を毎日食べている」「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」と回答した生徒の割合が多いのは小学校と同様である。「人の気持ちが分かる人間になりたい」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」と回答した生徒の割合も非常に高く、平成 21 年度調査よりもさらに増えている。

平成 21 年度調査では「学校の規則を守っている」と回答した生徒の割合がやや低かったが、本年度調査では改善されてきている。

普段の授業について「自分の考えを発表する機会が与えられていると思う」「生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う」と回答した生徒の割合が高く、平成 21 年度調査と比べても高くなっていることから、授業改善が進んでいることがうかがえる。「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」という生徒の割合も確実に増加しており、平均正答率との関連もあるので、今後も組織的に授業改善に取り組むことが期待される。

また、国語・数学の記述式問題に「最後まで解答を書こうと努力した」という生徒の割合も高く、平均正答率との関係が見られた。

一方で、「学校の授業時間以外に、普段、1 日当たり 1 時間以上勉強をする」と回答した生徒の割合はやや低く、「1 時間」を境に平均正答率に差が見られるため、今後も生徒や保護者に家庭学習の必要性を継続してアピールする必要がある。

さらに、「家で、自分で計画を立てて勉強している」と回答した生徒の割合もやや低く、平均正答率との相関があるので、家庭での勉強の仕方の指導についても配慮する必要がある。

※「質問紙に関する調査」の結果については、学習と平均正答率に関する事項に重点をおいてまとめを行った。